

# インターネットの負の歴史

190974 高野雄司郎

- 1 はじめに
- 2 黎明期
- 3 アングラ文化
- 4 最大級の炎上事件
- 5 おわりに

## 1 はじめに

インターネットは現代生活において必要不可欠のものになっている。子供からお年寄りまでスマートフォンやパソコンなど様々なツールを使いほぼ毎日インターネットに触れているのが日常である。しかしながら、だれでも気軽に利用できる反面利用方法は使っていきながら学ぶのが現状であり、それもあってかネット上での炎上や犯罪行為が後を絶たない。

私がインターネットについて調べようと思ったきっかけとして、2020年に発生した女子プロレスラーの自殺が挙げられる。この事件はあるテレビ番組に出演していた女子プロレスラーがインターネット上での誹謗中傷をきっかけに自殺し、被害者の母親が加害者に対して法的措置をとるも不特定多数かつ加害者の匿名報道が多く、根本的な解決には至っていない。この事件の他にも2019年に発生した東池袋での自動車暴走事故でも被害者遺族に対する誹謗中傷が今も続いているように、近年インターネット上での悪質な行為は深刻に表面化しており、その起源について知りたくなったのがこのテーマを選んだ理由の1つである。

このほかにもいわゆるバイトテロが少年を中心に発生していることや、後述するインターネット史上最大級の炎上事件にも少年と弁護士が関わっており、法学及び少年法について勉強するものとしてより深く知りたくなったことも理由として挙げられる。

## 2 黎明期

日本においてインターネットが流行し始めたのは1990年代後半だが、その中でも誹謗中傷などの悪しき文化は2ちゃんねる（現5ちゃんねる）が発祥といえるだろう。2ちゃんねるが一躍有名になった事件として、西鉄バスジャック事件が挙げられる。この事件は2000年に当時17歳の少年が起こした事件で、少年は常習的に2ちゃんねるを利用しており、少年のものとしてされる犯行予告が書き込まれていた。

この事件の直前に当時 17 歳の少年が面識のない主婦を殺害する豊川市主婦殺人事件が発生しており、西鉄バスジャック事件の犯人と合わせてキレる 17 歳という造語が作られ、流行語にまでなった。

また同年には新潟少女監禁事件も発覚していた。事件は 1990 年 11 月に当時 9 歳だった少女が犯人に誘拐され、約 9 年 2 か月にわたり犯人宅に監禁されたというものである。この事件と前述の 2 つの事件の犯人がともに引きこもりであったために、引きこもりは犯罪者予備軍であるとの風潮が強まり、この問題は現在に至るまで解決に至っていない。

黎明期に起きた事件としてスマイリーキクチ中傷被害事件も有名である。これはお笑いタレントのスマイリーキクチ氏が上司構成コンクリート詰め殺人事件の犯人だというデマを流され、多数の 2 チャンネル利用者から誹謗中傷を受けた事件である。氏は出身区、年齢、非行少年だったという過去が犯人グループと一致していただけで攻撃を受け、1000 人以上の加害者のうち検挙されたのはわずか 20 数名と当時のインターネットに関する法整備の問題も浮き彫りとなった。

### 3 アングラ文化

今までは相手に悪意しかない問題を取り上げてきたが、ここでは少し経路の違うアングラ文化について取り上げていく。アングラ文化とは非合法・非公式・非公然である文化のことであり、YouTube などで散見されるアニメや漫画のシーンを改編したいわゆる MAD 動画などがこれに該当する。この文化の発祥は前述の 2 チャンネルの流れを汲んだニコニコ動画であり、それがもはや一つのコンテンツとして他の場所でも定着するようになった。

しかしながら、アングラ文化は法律的には違法なものでありグレーゾーンが多く、作り手側のモラルが問われることが多い。その代表的な例がこれから紹介するゲイ向けアダルトビデオ作品群を利用したものである。

2002 年、当時のプロ野球ドラフト会議で上位指名が確実視されていたとある大学生がゲイ向けアダルトビデオに出演していることが発覚した。当時はそれ以上の問題に発展することはなかったのだが、2000 年代後半からニコニコ動画において同選手が出演していた作品が多くの人に知られるようになり、この作品の他の出演者も含めて題材とした動画投稿が急増するようになった。その人気は今も続いており作品で使用された語録がネット流行語にランクインするなど、元ネタを知らない一般ユーザーにも浸透しているといえる。

しかしこれらの作品は性的マイノリティを嘲笑するものがほとんどであり、また肖像権や著作権といった法を侵害してつくられているものであり、手放しでほめられたものではない。この作品がきっかけとなり実在する一般人に対し本人に

無許可で動画素材として利用する文化が定着したのも事実であり、愛知県在住の統合失調症の疑いがある男性や、2017年にゲームのオンラインプレイで問題行動を起こした自称中学生の少年が嘲笑的に扱われている。

## 4 最大級の炎上事件

インターネットを語るうえで欠かせないのがこれから述べるハセカラ事件であり、私が知る限りインターネット史上最大級の炎上事件である。2012年、2009年から約2年半にわたり2ちゃんねるで不特定多数への誹謗中傷を繰り返してきた当時18歳の少年が、自身の過去の書き込みが原因で容姿、住所、進学先、家族構成、交友関係などありとあらゆる個人情報を特定されてしまった。少年は被害の拡大を防ぐために弁護士に弁護を依頼するが、この弁護士が業務上多くの不手際を残したと掲示板の住人に判断され、さらに炎上してしまった。

この騒動は現在も解決しておらず、ほとんどの炎上が時間で解決する現代においては異様な光景である。

この騒動で結成された集団は様々な事件を起こしており、代表的なものとしてグーグルマップ改ざん事件が挙げられる。2015年4月に、皇居や警視庁、広島の新爆ドームがオウム真理教を連想させるような名称へと改ざんされ、3名が書類送検された。この事件で当時の第一弁護士会会長が「弁護士制度に対する重大な挑戦」と抗議するほどの騒動へと発展した。

また2020年には現在のチャンネル登録者数が160万人を超える人気YouTuberが、騒動で結成された団体の作成した作品を団体の意図と違う目的、及び商業利用したことで炎上し、住所を特定された。YouTuberとコラボした吹奏楽団は解散に追い込まれ、YouTuberも作品の封印を余儀なくされた。また、別人の家がYouTuberの自宅だとされ、ニュースで報道されるまで攻撃を受け続けるなど、無関係のヒトを巻きこむほどの事件となった。この事件の余波で逮捕された男性は、大阪の有名大学院に通い、趣味の天文学では文部科学大臣賞を受賞するほどの優秀な人物であり、改めてインターネットの恐ろしさを世に知らしめた。

## 5 おわりに

これまでインターネット上の問題について触れてきたが、これららの問題に対し根本的な解決には至っていない。法改正も昔に比べて進んではいるのだが、誹謗中傷がなくなったわけではない。何故ネット炎上は亡くならないのかということ、個人情報の特定は刑事罰

に問えないからである。ネット上に個人情報を公開する行為は刑事訴訟に持ち込みにくく、侮辱罪を厳罰化したとしてもそもそも刑事罰に持ち込めないのでは意味がない。また、侮辱や名誉棄損に対しては被害者が自発的に動く必要があることや、発信者の情報を知ることができる IP アドレス開示は有効に活用しなければ効果が薄いことなども理由として挙げられるだろう。社会問題として、失うものがなにもないいわゆる「無敵のヒト」も多く、そういった人々はどれだけ法が改正されようと誹謗中傷を続けると私は考えている。インターネット黎明期には、「うそはうそであると見抜ける人でないと(インターネットを使うのは)難しい」という 2ちゃんねる 開設者の西村博之氏の言葉を誰もが知っていた。しかし今ではそれも忘れられ、マスゴミという言葉を使いメディアの報道を信じない人々が、自分の嫌いな人物や団体が叩かれている記事には真偽も確かめず嬉々として書き込む恐怖現象が発生している。前述の大学院生のように雄主な人物であっても書き込み 1 つで将来を失う可能性があるため、これを見た方々には自分自身及び将来結婚して子供が生まれたときにインターネットの恐ろしさについて注意と啓蒙を促していただきたい。